

介護老人保健施設オアシス21

症 例 概 要 入所者：80代 女性 要介護度5

病名：認知症（混合型の疑） 高血圧症 腰椎圧迫骨折

経過：40年前から長男夫婦と同居。夫が他界後、肩を傷め家事支援が必要となったが、家族関係が悪く、タクシーで買い物へ行き、お惣菜を買って食べ、デイサービス利用をされていた。

R4年5月腰椎圧迫骨折、両肩痛もありA病院入院。コルセット作成時、花川病院回復期リハビリ入院。杖歩行困難で自宅には戻れず当施設で生活リハビリ入所となった。

認知症がつよくピック病化に注意が必要なほど、混乱、拒否、泣くなど精神的不安定であった。認知症ケアとしてアドラー心理学の勇気づけをケアにとりいれ、愛情を持った親身な対応をチームで提供。ぬりえの個展をきっかけに、徐々に落ち着き笑顔が見られるようになった事例。

内 容

オアシス入所時、不穏が続き泣いたり怒ったりと気分の変動が激しく、BPSDの対応について施設全体で事例検討会を通して認知症ケア方法を話し合っていた。

ご本人は家族と疎遠で、肩痛や腰痛など慢性慢性疼痛を抱えていた。そんなところにコロナクラクター発生し居室中心の生活を余儀なくされてしまった。

抑うつ状態の改善方針に重点を置きアドラー心理学の勇気づけを通してこころのケアをしていくことに着目しチームで支援することにした。

全職種で勇気づけのケアを実践。気分の落ち込みが激しい時は、今まで頑張ってきた過程をほめて勇気づけを実践。介護、看護とリハビリも全員で手を握る・会話をするなど安心感を持ってもらう支援を実施した。精神不安が強いため、他の楽しみを見つけ集中できる時間をつくろうと、ご本人の好きなキャラクターのぬりえを実践したところ、とても集中して楽しそうにされていた。作品として、オアシス内にぬりえの個展を実現した。ご本人も「ワシが書いたんだ。いいべか（笑）」と笑顔となっていった。

その後、塗り絵に一生懸命に取り組む姿があり、個展へ次々と作品を展示することができるようになった。リハビリの拒否が強かったが、個展の前を歩行訓練できることを嬉しく思い、スムーズに歩行訓練の導入ができるようになった。

時々不安がつよくなるが、職員がそばにいることや、「いままでの頑張りはすごいね。私も〇〇さんのよ

うに頑張るよ」など勇気づけの言葉かけにより、徐々に穏やかになり笑顔を取り戻していった。

全職員チームによる勇気づけを中心とした認知症ケアで精神状態が安定し、笑顔が多くきらきらと輝いた表情になっていった。心のケアで安心感が得られ、塗り絵が生きがいとなり、絵を他者へプレゼントするなど本来の明るくユーモラスなご入所者を取り戻せることができた事例である。